

集団の安定性を高め 崩壊を防止する方法について

～多方面からのアプローチと実行～

横浜創英中学校 SC 第一期生 奈良橋 篤生

研究の背景

世界には、様々な集団が存在し、日々、生まれては消えていく。形成されてすぐに崩壊してしまうものもあれば、長く生き残り続けるところもある。また、集団内での熱意や協調性も、集団によって大きく違う。これらの差は、どのような要素から生じるのだろうか。また、より安定した集団を形成させるには、どのような手段が有効なのか。そもそも、そのような集団は作ることが可能なのだろうか。それらを多方面からアプローチし、解明していく。

最大目的

集団の安定性に関する要素を導出し、それを利用した、安定した集団を形成させ、その集団の特徴を実際に調査する。

研究方法

初めに、「安定した集団」とは何かを定義し、最大目標に関連する事象について、それぞれ調査/考察し、それらの結果を統合/分析し、「安定した集団」はどのように形成されるかを調べる。

また、調査した「安定した集団」状態に近いものを実際に形成させ、どのような動きがあるか、観察/実験/調査する。

「安定した集団」の定義

複数の参考文献⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾により、以下がこの研究における「安定した集団」の定義とする。なお、今後の研究によっては、この定義は変動する可能性がある。

・形成されてから崩壊するまでの期間が長い集団

- ・より全員が熱意をもって行動できる集団
- ・不満が発生しても、さらなる不満が発生しないように解決することができる集団
- ・ある程度の人数を維持できる集団

この研究においては、これらの条件を満たせば満たすほど、理想的な「安定した集団」に近づくと言える。

調査 1

まずは、大集団の安定性と形成/崩壊の関係性に応用させるために、実際に偶然できた集団をモニタリングし、小集団の形成/崩壊過程を観察することにした。

調査目的

どのような過程を経て、どのように小規模集団が形成され、崩壊していくのか。また、そこまでの時系列はどのような順番になるのか。それらを調査し、どのように集団の安定化に活用できるか調査する。

調査方法

2023 年 7 月 11 日に行われた、第一回横浜創英サイエンスフェスタで、SC 第一期生/第二期生の合計約 160 名が同時に集まったホールに、スマートフォンのカメラを設置し、撮影した。ほぼ全ての参加者に協力していただき、当日の 10 時 19 分から 11 時 16 分まで録画し、1 分ごとに分けて、カメラの前のブースの人数を録画データから調査する。なお、カメラの前のブースとは、(画像 1)の円で囲った部分であり、スマートフォンは壁に粘着テープで張り付けて撮影している。



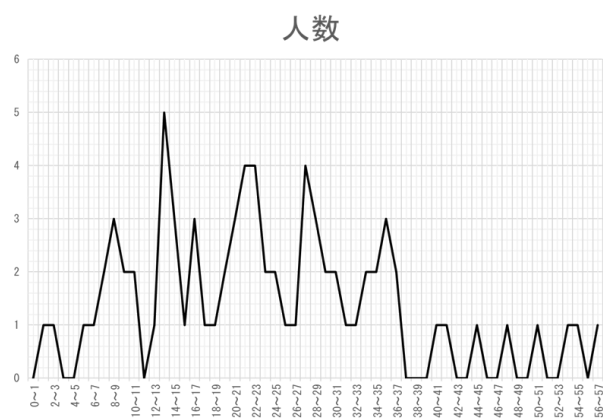
(画像 1 目の前のブースとその周囲)

調査結果

映像の撮影に成功した⁽⁴⁾。これから得られた、カメラの前のブースの人数データを1分ごとに整理した表が(表1)だ。また、人数の変遷を可視化するためにグラフにしたものが(グラフ1)である。なお、(グラフ1)の「TIME」の欄の単位は、分である。

TIME	人数	TIME	人数	TIME	人数
0~1	0	20	2	39	0
2	1	21	3	40	0
3	1	22	4	41	1
4	0	23	4	42	1
5	0	24	2	43	0
6	1	25	2	44	0
7	1	26	1	45	1
8	2	27	1	46	0
9	3	28	4	47	0
10	2	29	3	48	1
11	2	30	2	49	0
12	0	31	2	50	0
13	1	32	1	51	1
14	5	33	1	52	0
15	3	34	2	53	0
16	1	35	2	54	1
17	3	36	3	55	1
18	1	37	2	56	0
19	1	38	0	56~57	1

(表1 ブースに集まった人数表)



(グラフ1 ブースに集まった人数のグラフ)

(グラフ1)を見るとわかる通り、人数の変遷を可視化すると、人数が増えては減り、減っては増える、波状になっている。たった1時間のモニタリングだが、多くの回数、人数が変動した。

考察

ここから考えられるのは、ブースに集まった人々に天邪鬼の心理が働いていたからだと考えられる⁽⁵⁾。これは、人気のない集団に対して興味を示し、そちらに向

かって人々の関心が移動するというものである⁽⁶⁾⁽⁷⁾。これが行動にも表れ、このブースに集まった人は、他のブースに移っていったのだと考えられる。また、その逆である、このブースの人气がない時も同じ心理が働き、人々がこちらに移動してきたのだと考えられる。

また、天邪鬼心理以外にも、単純に、人がいるところに人が集まる心理も関連していると考えられる⁽⁸⁾。飲食店で「人気商品ランキング! 今月は〇〇第一位!!」などという張り紙が書いてあると、注文を特に決めていない客は、「では、〇〇を注文してみようか」となるのと同じ原理である⁽⁹⁾(論文内では、この現象のことを「広告現象」と呼ぶこととする)。グラフの一部が、じわじわと人数が増えているのはこの効果であると考えられる。これは、「みんながやっているのだから、自分もやらなくては」という心理が働くのであれば、シチュエーションによっては同調圧力も関係していると言えるだろう⁽¹⁰⁾。

活用

これらの心理/現象を活用すると、以下のような安定化の方法が考えられる。

- ・最初はわざと集団を少人数/小規模にして、集団から周囲に効果的なPRをし、天邪鬼効果を利用して、興味を持った人が安易に集団に入れるように、後押しする。

- ↳これにより、集団に人を入れることが容易になり、内部の入れ替わりが激しい集団になっても安定させやすくなる。

- ・先ほどとは逆に、最初は地道に集団を拡大させ、ある程度成長した段階で、集団の大きさをアピールするようなPRを打ち出すことで、広告現象や同調圧力を働かせて、より安定した人数をコンスタントに集団に入れることができるようにする。

- ↳これにより、先ほどと同じような効果が得られやすくなると考えられる。

前者は、人数が少ない時にのみ、後者は多い時のみ使用することができる手段であるため、その時の集団

の人数によって使い分けるのが効果的であると考えられる。集団が小規模で困ったときには前者を、それを使って増えてきたら後者を、人数の遷移の波の影響で規模が縮小してきたら前者を効果的に使えばいい。人数の調整までしなくても、今回の調査で、自然に増減することが判明しているため、そこまで管理せずに、人の流れに任せて管理すればよいと考えた。

調査 1 の結論

集団の形成/崩壊には波があり、定期的に規模が縮小したり拡大したりする。また、それに天邪鬼心理や広告現象、同調圧力などを組み合わせることにより、よりたくさんのニューカマーを呼び込むことができ、集団の安定化に貢献できると考えられる。

調査 2

次に、身近な大集団である、「推し活」の集団形成メソッドについて調査し、それを違う集団の安定化につなげることが可能か、考察することにした。

調査目的

推し活はどのようにして集団として成立しているのか。また、推し活の集団はどのように強固になっていくのか。これらが、それが一般的な他の集団の安定化に活用できないか調査する。

調査方法

現代における推し活の構造を、主観的な視点(知人から直接、推しについて聞く/インターネットで押しに対するコメントを調査する 等)や、客観的な視点(論文から調査する/知人の意見を第三者視点から書き換える 等)で調査し、双方にどのような意見の違いがあるのかや、そこから考えられる推し活の安定する構造を分析し、考察する。なお、客観的な調査はできるだけ信頼できるソースを選択するものとする。

前提

・「推し」とは、自身が熱狂的に活動を応援し、支援し、

好感を持っている対象の存在のこととする⁽¹¹⁾。

・「ターゲット」とは、この論文における、推し活をしている人のことを指す。

・「推し活」とは、推しに対してそのような応援/支援行為をすることとする。ターゲットが一人である場合は該当しない。また、推しからターゲットへ、ターゲットから推しへと、双方が利益を送り続けていることが条件であるものとする⁽¹²⁾。

調査結果

日頃より推し活をしていることを公言している、とある知人に「推し活って、どういうこと?」と質問した結果、「なんか、その、恋するっていうか、その人に人生を捧げる? その人と死んでも後悔ないと思える…、ってことかな。うん。」と供述しており、別の知人は、「愛おしくて可愛くて、いくら何のミスをしてしても許せるし、いくら課金しても課金しきれない存在。」と供述していた。

また、インターネットのコメントを見てみると、かなり「とても好きで離れられない」「人生に不可欠」などの内容が多く、知人らの話と一致している部分が多々あった^{(13)~(23)}。

客観的な面で見ると、ターゲットは共通の価値観や推しに対しての感情などによって推しを応援するネットワークができていて、対する推し本人も、瞬間的な感動やアーティストとしての価値を調整して、推して推される釣り合いを作っていると論じられているものが多かった^{(24)~(28)}。

考察

主観的/客観的双方の意見を聞き、推しとターゲット同士で、お互いに利益を調整し合うことにより、コンスタントに利益を提供し続けていることで、「推し活」という大集団が生み出されているのだと考えた。平家物語に「驕れる人も久しからず」と書いてある⁽²⁹⁾通り、推しが利益に対して強欲になれば、ターゲットは次第に推しへの投資/応援が追いつかなくなり、ストレスが増

加し、推しに対して失望感を抱くことになる^(30~33)。また、利益を気にせず活動していても、ターゲットからの支持は集まるかもしれないが、すぐに推し自体が活動できなくなるだろう。しかも、熱狂的なターゲットの場合、ホスト狂いのように、いつまでも投資/応援し続けてしまうため、破産を招いてしまう危険性がある⁽³⁴⁾。そうすると、ターゲットの私怨が推しに直接向いてしまう可能性が出てくるため、それを避けるためにも利益関係を調節しなければならない。現在、推し活市場がここまで成長しているのは⁽³⁵⁾、この調整が上手に成功してきたからであると考えられる。

主観的な意見からは、「推しを感じると心の疲れが癒えていく」「推しに投資しないと心が締め付けられる」などの意見が多くあり、推しは心の安定に関与していると考えられる。先ほどの利益の話も含めると、推し活の集団は宗教に類似していると感じた。宗教では、教徒に説教や礼拝、冠婚葬祭のサポートなどの利益を提供し、お布施や募金等の形で教徒は教団に利益を返す。これは、先ほどの推し活の利益関係と酷似している。ただ、相違点も複数ある。一つ目は、教団側が利益に対して強欲になっても、教徒側は支持することをやめられない点である。宗教は自身が良いと思って教徒になるものだが、推し活のものとは比べ物にならないほどの同調圧力や強迫観念が働いていて、容易に抜けることはほぼ不可能である。教団が圧力をかければ、教徒が破産してもなお利益を搾り取ることも可能になってしまうのである。怨念を教団に向けても、他の教徒からの圧力で潰されてしまうのであろう⁽³⁶⁾。

また、独裁国家も同じようなものだと考えられる。国家元首が推しに相当するとなると、ターゲットは国民である。国民は労働や税、政権支持などで元首に利益を与え、政治の改良という形で国民に利益を返している⁽³⁷⁾。だが、これも圧力や強制力が強く働いているため、推し活とは少し違う。

その点、推し活はそのような力や心理現象があまり働いていないため、治安良く成長し続けているのだと考えられる。しかも、圧力なしで、「愛おしい」と思うだ

けで、推しからの指示のみでパツと動くため、フリーダムでかつ割と安定した集団であると言える。

活用

これらの現象は、同調圧力や天邪鬼効果を極力使用しない、いわば「自然な集団」を形成するのに役立たせることができると考える。まず、集団の中心となる対象、推し活で言うところの「推し」を作り、積極的にPRし、周囲に利益を与えていく。それに気づき、「推し」に惚れた人、つまるところ、「ターゲット」にあたる人が、次第に集まり、集団にべったりとくっついていくようになる。先述した通り、このタイプの集団は、ターゲットに当たる人々が離れる可能性も低くなっていて、また、推しへの支持が時間経過によって支持が無くなりづらいため、コンスタントに安定した人数/支持を維持することが可能になるだろう。また、ターゲットが新規ターゲットを呼び込むことにより、加速度的に安定したターゲットが増えていくだろう。途中で、集団に合う/合わないの選別は自然に行われる⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾が、連鎖的な伝播が行われることによって、崩壊しづらい丈夫な集団になると考えられる。このように、集団にPRの中心核を作ることにより、安定した集団が形成されやすくなるだろう。

調査2の結論

推し活のメカニズムを採用した集団では、同調圧力や広告現象などをあまり使用せずに、自然な安定した集団を形成させるのが容易になる。それには、ターゲットと推しとの間の利益関係の調整がとても大切である。調整が成功すれば、ターゲットがニューカマーを呼び込んで、そのニューカマーもターゲットになり、また別のニューカマーを呼び込むという、推し活のコミュニケーションの伝播が発生し、継続的に安定した集団を長期的に形成させるのも容易になる。別ジャンルの集団の形成にも、推し活は活用できる。

調査 3

さらに、集団の崩壊を活用できるか考えるために、様々な集団の形成、崩壊経緯について調査し、集団形成にかかわる可逆性について考察することにした。

調査目的

現存している集団や、すでに崩壊している集団など、人間の集団だけではない、様々な集団の形成、崩壊過程について調査、分析し、身近な集団にそのメソッドを活用できるか調査する。

調査方法

会社や有志団体、友人のようなネットワークや動物社会まで、様々な集団の形成、崩壊の過程を、論文やインターネットなど、色々なソースで客観的に調べる。また、それらの情報をミックスして分析し、生物の本能的観点から、また、人間的心理の観点から、どのようなメソッドになっているのか分析する。

調査結果

以下の団体の過程を調査した。以下の表は、その結果である^{(39~(138o}